

令和4年度 前期卒業式 式辞

長く続いた厳しい暑さも朝夕にはようやく落ち着きを見せ始め、そこここに秋の気配が感じられる爽やかな今日の佳き日、PTA 会長様はじめご来賓の皆様、保護者の皆様のご出席を賜り、ここに令和4年度兵庫県立西宮香風高等学校前期卒業証書授与式を挙げていきますことを、心から感謝申し上げます。

ただ今、卒業証書を授与いたしました5名の卒業生のみなさん、ご卒業おめでとうございます。教職員一同、心よりお祝い申し上げます。今日の卒業の日を迎えるまでには、通り一遍の言葉では言い表すことのできない、たくさんの出来事があったことだと思います。それらの日々を乗り越えてきたみなさんの努力に対して、深い敬意を表したいと思います。

保護者並びにご家族の皆様、本日は誠におめでとうございます。立派に卒業の日を迎えられたお子様の姿に、感慨もひとしおのことと存じます。また、この場をお借りいたしまして、これまで本校にお寄せいただきましたご支援、ご協力に深く感謝を申し上げます。

さて、今まさに高校卒業という輝かしい瞬間を迎えたみなさんに、お伝えしたいことがあります。

私たちの社会は今、物事を省みるときに人が成し遂げたことを素直に肯定することよりも、できなかったこと、足りなかったことを指摘することばかりに重きを置くようになってきていると感じます。確かに、進歩、発展、成長といった概念においては、その姿勢が必要な場面があることも事実です。けれども、一人ひとりの日々の営みというレベルで物事を見ると、失敗も後悔もせず成果を出せる人などいるはずもないのに、ようやくたどり着いた成果が脇に置かれ、途中の失敗にばかり焦点が当てられてしまうのはとても悲しいことです。

人は、がんばったこと、誠実に生きたことに対して、もっと肯定され、もっと受け入れられていいのです。途中にあった失敗も後悔も、ぜんぶまとめて受け入れられていいのです。そしてもちろん、受け入れてもいいのです。

昭和の時代、赤塚不二夫という漫画家がありました。『おそ松くん』、『ひみつのアッコちゃん』、『もーれつア太郎』といった数々のヒット作を生み出しました。その赤塚さんの代表作が『天才バカボン』です。当時も今も「ギャグ漫画」という位置づけの作品ですが、個性的な登場人物達の語る言葉が、作品が発表された1967年から50年以上の時を超えて、現代を生きる私たちに温かな示唆を与えてくれます。

作品の中で登場人物である「バカボンのパパ」はこう語ります。

わしは バカボンのパパなのだ
この世は むずかしいのだ
わしの思うようにはならないのだ
でも わしは大丈夫なのだ
わしはいつでもわしなので 大丈夫なのだ

あなたも あなたで それでいいのだ

赤塚さんと親交のあったタレントのタモリさんは、バカボンのパパを通して語られる赤塚さんの思想についてこう述べました。

赤塚不二夫の考えは、すべての出来事、存在をあるがままに前向きに肯定し、受け入れることです。それによって人間は、重苦しい意味の世界から解放され、軽やかになり、また時間は前後関係を絶ちはなたれて、その時その場が異様に明るく感じられます。この考えを赤塚不二夫は見事にひとこと言い表しています。すなわち、「これでいいのだ」と。

高校卒業後のみなさんの人生は、これまで同様、決して平坦な道ばかりではないでしょう。その道のりを歩いていくみなさんには、自らをあるがままに前向きに肯定し、受け入れる心、すなわち自分を愛する心をどうか大切にしてほしいと願っています。その自分を愛する心こそが、他人を愛し、世界を愛する心につながっていくのです。

どうかしなやかに、そして強かに生きてください。そのような生き方の向こう側には、必ずやあなたのことを認め、温かく見守り、寄り添ってくれる人との出会いがあります。そう、信じています。

みなさんの前途が明るく、幸多いことを心からお祈りして、式辞といたします。

そして最後に、もう一度言わせてください。「卒業おめでとう。これでいいのだ」

令和4年9月30日

兵庫県立西宮香風高等学校

校長 谷口 暢謙